

障害者支え1400キロ併走

風間深志さんらの豪大陸自転車横断 渡辺医師が帰国



風間深志さん(中央)らと南氷洋に面したがけの上で記念撮影。渡辺義孝さんは右端

甲府

「経験、治療に生かしたい」

山梨市出身の冒険家風間深志さん(58)が障害者と自転車車で挑戦するオーストラリア大陸横断に、サポートドクターとして同行した国立病院機構甲府病院スポーツ膝疾患治療センターの整形外科医・渡辺義孝さん(34)が帰国した。渡辺さんは風間さんらとともに16日間かけて約1400キロを走破。「健常者以上の走りを見せた障害者に元気づけられた」と話している。

全まひになった男性、左膝腫瘍で人工関節になった女性の3人。



夕食でバーベキューを楽しむことも。ラム肉を焼いてビールで乾杯=いずれもオーストラリア

一緒に走行したのはオートバイレース中の事故で左足を負傷した風間さんのほか、交通事故で右足を失った男性や労災で頸椎を損傷して左片不

世の下、青い空の下、
世界一の直線道を
たすらすら走る

渡辺さんは8月29日に日本を出発。全行程約5千キロのうち、担当する南西部の都市カールグーリーから南部のセデューーナまでを併走した。真っ青の空の下、地平線のかなたまで続く道路を走り続ける日々。「自然の中をひたすら走った。貴重な経験で楽しかった」と振り返る。

横断中は数十キロごとにあるロードハウスに宿泊。ロードハウスでは同様に大陸横断に挑戦している人や現地住民と交流し、「毎日が宴会だった」(渡辺さん)。

渡辺さんら帯同する医師は5人がリレー形式で併走しており、渡辺さんは9月14日、担当区間を走り終え、一足早く帰国の途に就いた。風間さんらは東海岸のシドニーを目指し、現在も走行を続けている。渡辺さんは「ハンディを持つ人と長期間行動をともにしたことで、患者の目線に近づくことができた。この経験を今後の治療やリハビリに生かしたい」と話している。